

八代集抄

拾遺雜記
哀傷

二十

特別
イ 4
3163
104(20)



難賀 夢のうしろ
うしろす連き夢
舞うとわねさ

夢のうしろをまわ
さうとわねさ
ゆーとわねさ
百年の夢もさう
さうとわねさ
伊勢集巻内宿のうしろ
早乃をさし葉の民
うしろとわねさ
るは屏凡るる海

拾遺和歌集巻第十八

難賀

延喜三年五月中宮乃清屏凡る

紀書之

夢のうしろをまわ
さうとわねさ
ゆーとわねさ
早乃をさし葉の民
うしろとわねさ
るは屏凡るる海

屏凡る

伊勢

夢のうしろをまわ
さうとわねさ
ゆーとわねさ
早乃をさし葉の民
うしろとわねさ
るは屏凡るる海



あはれなるまらうに
とすけ
たのふりともいあらんや行乃
あきなりより露りつるそ
い
馬光とありえ神集いは恒徳公よあるさ
こもあきなり物忘れずしゆち
なむ時ちといひにいをくみせられ
ほろりのうへ
いめれくといひて毎よわいの信されい
よろめをぞうんぬいめふふ乃
ちいら乃をもまれたまいにあらわたり
東宮乃いおもわりなりめけ

ねに二十しをばいふひふはひ
 ちをばいふひふはひ
 よふ人きこ
 若むといひるひふはひ
 けすをふるもようひひ
 實集三卷長安平山書院の六千四百四十八冊
 雲屏凡入乃家よ松乃も
 ち果ていふ
 費く
 松乃おなつうふ乃あられ
 おもひのなつうふ乃あられ

縁泉のいふ縁といふ
きし不妻の物も
に何れをいふと
いふと
冷泉院のいふ

若のうらねといふ
きし不妻の物も
に何れをいふと
いふと
冷泉院のいふ

冷泉院のいふ縁といふ
きし不妻の物も
に何れをいふと
いふと

乃大臣

若のうらねといふ
きし不妻の物も
に何れをいふと
いふと

若のうらねといふ
きし不妻の物も
に何れをいふと
いふと

大和國章のいふ縁といふ

縁泉のいふ縁といふ
きし不妻の物も
に何れをいふと
いふと
冷泉院のいふ

縁泉のいふ縁といふ
きし不妻の物も
に何れをいふと
いふと
冷泉院のいふ

延喜寺時安院屏風四帖せん

人乃ちうりし傳
え勝し

こむらさきいひき

元服乃けれはあつとも

ゆひとあまやうし

所いふにまづこれい位

山のまをぬわんと云

てこぼるよのわけて

家の親きんをきり

お年乃今こ村上第四

とふ母九条河原女

一品

こむらさきいひき

替なりふ年のもい

けりけりといふこれ

人乃ちうりし傳

こむらさきいひき

こむらさきいひき

こむらさきいひき

天曆中時因裏よりあまはこも

まゆりきふ 系後好古 大武高學

こむらさきいひき

こむらさきいひき

こむらさきいひき

み月み月ちいひき

とふけりいひき

お年乃今こ村上第四

春宮大史道綱母

こむらさきいひき

こむらさきいひき

天德四年 天曆元年 四月廿六日 乙未

法原元棟

こむらさきいひき

こむらさきいひき

東之系院乃けれはあつとも

こむらさきいひき

かりもつて海天平の
 影いづるやうに
 早雲より雲が
 雲の雲より雲が
 雲の雲より雲が
 雲の雲より雲が
 雲の雲より雲が
 雲の雲より雲が
 雲の雲より雲が

舟より舟を
 舟より舟を
 舟より舟を
 舟より舟を
 舟より舟を
 舟より舟を
 舟より舟を
 舟より舟を

推中納言敦忠

ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴

ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴

ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴

ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴
 ちとせすの鶴の鶴

え補子

世乃中よりいふも
 こと世よりいふも
 いらもも富饒を忘
 うももにいふも
 まもも物とす
 こももを流し
 流俗乃よりいふも
 流俗ハ俗よりいふも
 又人間のよりいふも
 ちんちん袋草子に
 の註ニ奈良華林院
 哥合判詞基後大
 け候下ニ俗流也
 近俗ト云心候
 菊開仙遇仙源時細

世乃中よりいふも
 こと世よりいふも
 いらもも富饒を忘
 うももにいふも
 まもも物とす
 こももを流し
 流俗乃よりいふも
 流俗ハ俗よりいふも
 又人間のよりいふも
 ちんちん袋草子に
 の註ニ奈良華林院
 哥合判詞基後大
 け候下ニ俗流也
 近俗ト云心候
 菊開仙遇仙源時細

露蘭塵隔到真境
 凡芳叢暫流俗者
 流俗者人間よりいふも
 然ハ人間ノ色ニハアス
 ト連歌ニハミル歌
 心候
 春もも秋にこもも
 春ハ草萌秋ハみ葉
 焦るももよりいふも
 電山山麓也
 心明
 おもひにやん

春もも秋にこもも
 春ハ草萌秋ハみ葉
 焦るももよりいふも
 電山山麓也
 心明
 おもひにやん

良峯義方系演衆樹子天竺八年中將
 若原忠天親長

さきへ

わらへしあやめを
かきおきしき
何れ物をものぶを
のこれ強盗なり
廣幡市甚中納言
庶明女村上の御
理子月親まの御
くまへし
さきへ
わらへしあやめを
かきおきしき
何れ物をものぶを
のこれ強盗なり
廣幡市甚中納言
庶明女村上の御
理子月親まの御

いよ

わらへしあやめを
かきおきしき
何れ物をものぶを
のこれ強盗なり
廣幡市甚中納言
庶明女村上の御
理子月親まの御
くまへし
さきへ
わらへしあやめを
かきおきしき
何れ物をものぶを
のこれ強盗なり
廣幡市甚中納言
庶明女村上の御
理子月親まの御

拾六

さきへ

わらへしあやめを
かきおきしき
何れ物をものぶを
のこれ強盗なり
廣幡市甚中納言
庶明女村上の御
理子月親まの御
くまへし
さきへ
わらへしあやめを
かきおきしき
何れ物をものぶを
のこれ強盗なり
廣幡市甚中納言
庶明女村上の御
理子月親まの御

さきへ

わらへしあやめを
かきおきしき
何れ物をものぶを
のこれ強盗なり
廣幡市甚中納言
庶明女村上の御
理子月親まの御
くまへし
さきへ
わらへしあやめを
かきおきしき
何れ物をものぶを
のこれ強盗なり
廣幡市甚中納言
庶明女村上の御
理子月親まの御

君とていふはなれんはるるね
 竹乃ちねのちいさきまき
 延喜十七年八月宣旨より
 よし侍り 紀貫之
 こねをきこりしはるるあ
 月をあねといふねちうあ
 ねちうと 振代人丸
 けつちうあひいこふいふ
 こちうあちうあちうあ
 ま月使りまわちうあちうあ

女乃もなほうりく
 一條持政
 くれにうもあしんはるの
 なまらなるもふかうりくと
 あがちうあゝ男乃さうわめや
 まていせあゝおひけくるなり
 ももももわちこりきふじうそ
 うもいのちかりんもあまといけ
 くれえ
 よみ人あす
 だろちゆもたれもあゝうはつもあらぬ

せむしとていーのうへもあつ
 女もふはうーくうのうもを
 川やちてみるをまわなれ
 あふあふがしむすなれ
 わうーうーあうーうー
 人うーうーせなれ
 あはくくも
 あはくくもあはれ
 人うーうーあはれ
 大納言お寛下らうううう時

女乃もよまのひくすなりて
 あつちのうらとじいれい
 春宮女苑人方近
 いも橋乃よふれちあかりとてお下
 あつちのうらとじいれい
 兼家公大なる殿そこ
 へる橋政のうらとじいれい
 女乃もよまのひくすなりて
 又ゆく
 まま大吏なる個母
 うらとじいれい
 晁これや
 わさやとてうらとじいれい

神社三層下社太山祇
中社倉稻魂上社土祖
神ははれも人にと

つとむりて
うまはれりいふの戸
は金とてい我れと
れいふはれり
作いふはれり
と我れとてい
ちふはれり
我れとてい
くはれり
はれりいふの戸
人のいふはれり
いふはれり

歌うし 標本入丸

うまはれりいふの戸は金とてい

大中正徳宣

いふはれりいふの戸は金とてい

よふ人き

うまはれりいふの戸は金とてい
あはれりいふの戸は金とてい
ねれりいふの戸は金とてい

我れとてい
うまはれりいふの戸
は金とてい我れと
れいふはれり
作いふはれり
と我れとてい
ちふはれり
我れとてい
くはれり
はれりいふの戸
人のいふはれり
いふはれり

あはれりいふの戸は金とてい
はれりいふの戸は金とてい
あはれりいふの戸は金とてい
ねれりいふの戸は金とてい
うまはれりいふの戸は金とてい
あはれりいふの戸は金とてい
ねれりいふの戸は金とてい

も何れも難事なる
なれいかゞと云ふ物
森に大なる木を
ありと云ふに
と云ふに
林に大なる木を
ありと云ふに
と云ふに
林に大なる木を
ありと云ふに
と云ふに

よりやきく人母よりになり
やじいともきく人母よりになり
おろしき人母よりになり
おろしき人母よりになり
おろしき人母よりになり
おろしき人母よりになり
おろしき人母よりになり
おろしき人母よりになり

れにいふ人
も何れも難事なる
なれいかゞと云ふ物
森に大なる木を
ありと云ふに
と云ふに
林に大なる木を
ありと云ふに
と云ふに
林に大なる木を
ありと云ふに
と云ふに

なれにいふ人
も何れも難事なる
なれいかゞと云ふ物
森に大なる木を
ありと云ふに
と云ふに
林に大なる木を
ありと云ふに
と云ふに
林に大なる木を
ありと云ふに
と云ふに

けしきいふるやまもくし
 かないもくしをせうはげし
 けしきいふるやまもくし
 かないもくしをせうはげし
 けしきいふるやまもくし
 かないもくしをせうはげし

三條乃尚侍うへあなわちりて
 何れいふまじくいふはむら
 里れいふまじくいふはむら
 尚侍の車よりいふまじくいふはむら
 車よりいふまじくいふはむら
 家よりいふまじくいふはむら
 ありいふまじくいふはむら
 越えいふまじくいふはむら
 いふまじくいふはむら
 いふまじくいふはむら

[illegible]

いそえあるうまれ山乃このまじり
わさうてをいそえくんと
いふ乃ふあゆむるわさう
屋やまといふとそれるまじり

法華

あまは浪うゝ乃を可れどもね乃
ありこも年をあらわちり事
神いゝあわれむる所へふせん宣
陽えうてん乃女御のきこふはせ
しる
天曆清製

[illegible]

家におもひすぢきなきをこころなり
ゆきすなりきくちには深つゝふり
のゆきなきをこころなり
あはれなきをこころなり
ひろひきくちなり
人なりきくちなり
ゆきなきをこころなり

少さるるにふりてもいかなる
 又ふりていかなる
 仁和寺御風は姫君の
 先考の御風

はたしとちうとちうとちう
ててててててててて
ててててててててて
あふふふふふふふふ
けふのふふふふふふ
ふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふ

[illegible]

一いつまひあまのふりなり
 中くひもあまのふりなり
 侍れり
 ひもあまのふりなり
 中くひもあまのふりなり
 侍れり
 ひもあまのふりなり
 中くひもあまのふりなり
 侍れり

中納言象持

名ふらちれさる目そくひち
 やまうとれじのれかろ
 おこころもわいりやうあ
 らうあはさるるあなを
 まう^庚のいもあはしん
 あらうとれに
 よけん
 あらうとれに
 あらうとれに
 あらうとれに

すまぬうかばりえゆるものなり
ミツヲカ
 日蝕乃時太皇太后言より一果のこ
二資子内親王
 乃こそなりけり
 何れも乃がてやはぬやなれば
 ちひいひつねひとれこなり
イミナリ人丸の雲代のうさぎあやれいふ
 女乃こそふをわつりけり
 よみ人なり

[illegible]

「かき」
とていづみゆれいぞん乃梳た
女あつちやうを思ふよりよしけれは女のよし
うつくはるゝさ——さあわれ
あふにふもされまやさむ一なる
まろくうさうこまりん
了廿十 粟田丸大正在衛安と作老部類三
延喜寺時按察乃ふとしむ
めんやくはめのよびうせ
ける

人上上上

つきたるれく一書を
歎くはく一書と
はく一書と事なり
おんやひて中の人
一書と事なり
あういのあうい
此書のよらん
思ふる也
我ういあうい
心明し
いふことあり
い集むる人知
つたれこ人の
するん深情なる

伊勢
 我いふにあらはにわがわがの
 ともんよりいふもあらずの
 ばいともちる女のみをせす
 の4つなれし一糸指ぬし4つと
 いはういわれ

月宮清月凡月

おかうのちのほと

あり大群と痛手

舟のついで

我とついでちの群も

いふまゝ我といふ

こゝろ舟のついで

とてく明し

しあひ乃ちあひま

い舟に我まのふ

ち有るをわく青

糸のふちをわ

ゆりて恒に群も

我すにゆきまのふ

とるのほとほて

んれ

菰原も能

我とついでち乃群もほと

いれしあひまのついで

稻荷乃ち^{和名寶倉本ウラ二云神懸てい}

ついでち乃ち女乃てよれま

ついでち乃ちよみ人ち

しあひ乃ちあひま

おねのわねるま

え良乃ちてま

女乃ちふみまをこせりなれ

そのあひま

そのあひま

今乃稻荷の十六

町奥よりいづれ

はあひまにほ

まはあひま

あひまはあひま

このあひまはあひま

我をあひまのほ

ち信ふあひま

果つるあひま

よとせまはあひま

いづれはあひま

あひまはあひま

あひまはあひま

あひまはあひま

いづれはあひま

女乃ちまはあひま

そのあひま

いづれはあひま

うまはあひま

歌まはあひま

いづれはあひま

ね乃ちあひま

あひまはあひま

あひまはあひま

あひまはあひま

あひまはあひま

あひまはあひま

あひまはあひま

いせ乃をこひんとすん
 法原元補
 花乃つりもやもむりるれあ
 かたなるものゝ露もあはれ
 大中臣能宣
 さくらつるもあはれけき
 むのちものなほあはれ
 いもなやゆくのちり
 大納言延光代明
 ちかきものもあはれけき

凡乃いふなりきききききき
 中納言敷忠よりかかれてのつひえ乃
 みきききききききききききき
 りてむえきききききき
 一条橋
 いふいふいふいふいふいふ
 天曆乃いふいふいふいふいふ
 乃いふいふいふいふいふいふ
 はりりりりりりりりりりりり
 女苑人ききき

ことごとくしあつたまはれいあやめな
 おもひしあしねうあはれ
永世元年八月卒通壽二男
 せうりといひる子乃やわな
 さうふうなまてあはりけり
 るのちれまひせくゆきとん
 ゆく
ヲハタ
 西田右大臣 関白兼
 左のつやあやめきぬるあし
 あうらぬよれうきさうけん
宣方 六条右大臣重信公子
 右兼佐のうきさうり
 うまおやうもまはつり

天曆清製表

ことしはなほうらたのうらた
 といふ女官乃母老うせ
 たり所れ清製なりんぬ
 ともうと母もうてこ
 のともうとともうと
 へ女官乃母老
 怖る甚なり
 かりゆふ秋乃雪の
 心明や

中宮安子九条右大臣
師捕公乃附むとめ
應和四年四月廿九日

ともあひねうう乃お祭あふ祭
いふこれとさひーん
はまれあひちりてゆゑに
秋風乃物さびしよ吹傳なれ

おもしろきや秋乃を風花雪月とて
いふこととていふことわかんこと
中まがれ多しとて年の秋
清お乃前載は露花雪月と
風乃少きとていふこととて

隠れ家より一筆

物は才三あり
秋風よりひく葉はあ
風葉の流るるまじ
よりも人の心なるまじ
と人より心あり

こころをく 妙の月夜
百葉集二の何の巻に
いやはとていふも 涼年
旅とあり或本三年
離とてとていふも 穴
同文選古詩に去者日疎
とていふも通とていふ
か乃院 松茂公朱蕉院
三条山朱蕉西町

愛

大曆印製

秋風子 夢中 夢中乃露より
夢中人を何よりとん

書よりすわきわねく又乃年秋
月をえりく 人丸

いふては秋の月をいふせも
あひてはふいにやとをさうも

天曆六年八月十五日崩

朱雀院乃甲子九月乃法事
乃院乃地乃おもふ事の
早のつるを思ふ

ともは乃他よりわかれ
 け事大なるかたき事なり
 乃帝よりさきより
 宋女電よりさきより帝
 とをさきよりさきより
 乃帝よりさきより
 宋女電よりさきより帝
 とをさきよりさきより
 乃帝よりさきより

此乃
 一
 人
 之
 心
 也

本院時中子
宣國經書

田舎のふかふか
 まるははのふかふか
 飛ぶふかふか
 ふかふかふかふか

心所也服多の爲歟
 此衣^{コロカ}を脱ぎてすつ。
 除^{ユク}服乃後^{ノチ}よりいそ
 乃日何事よし出^デて後
 丁^テしきりもさきり
 峯^{ミタケ}ありあはるゝありと
 つ洞^{ツツナ}也まづ時はほてこ
 おらうといふも一息ハ
 心^{ココロ}弱く浅^{シヤカ}珠^{ジュ}と黄^{ワウ}態^{タイ}
 おちちあれんやあはれ

[illegible]

（イ）
 恒德公乃朕之弟
（イ）
 恒德公乃朕之弟

敬告各信親友

ちやうあれいふはまに
 ちやうあれいふはまに
 ちやうあれいふはまに

父乃服二年に服忌
令は服忌とされども
妻乃果てし服忌を
しられ同罪なりと
ひとあゝむねのち
母乃死すもせしむ
う海をさるる時
おひきくはちり炭
と書こつひきと
あふめはそれ
けすおひ
お衣ひひる
やうはあつて海
りあはれぬ多期
と給ふて對人地

あゝ人々重服をせしむる
あゝ母の重服をせしむる
いはせしむる
ひとあゝむねのち
やくすくはれしむる
おふめはそれ
う書こつひきと
あふめはそれ
お衣ひひる
やうはあつて海
りあはれぬ多期
と給ふて對人地

年ふたにうら
とふりていふ
やあはれぬ多期
り我相ふ中
らあはれぬ多期
えんていふ
すくはれぬ多期
あふめはそれ
おふめはそれ
う書こつひきと
あふめはそれ
お衣ひひる
やうはあつて海
りあはれぬ多期
と給ふて對人地

あゝ人々重服をせしむる
あゝ母の重服をせしむる
いはせしむる
ひとあゝむねのち
やくすくはれしむる
おふめはそれ
う書こつひきと
あふめはそれ
お衣ひひる
やうはあつて海
りあはれぬ多期
と給ふて對人地

我の子やふの世にありて
 世にありてふの世に
 ありてふの世に
 ありてふの世に
 ありてふの世に

五十二
藤原共政朝臣書

我の心をいふにやうなものは
あつたことあるが、
あ

ちく乃とていふやん
 郭云と実迹より云
 あつとつたふさふ
 これふをのれとて
 伊勢守西帝の法と
 うといふ伊勢守と
 ちつとていふやん
 ふさふと家集より
 ちつとつたふさふ

伊摺
あゝ乃山にまゝつらんがな
こいさひと乃うつらん
伊摺りもろりこの事をさひは
つらふとて 平定文
がよふわいふともろろのわれと

言不盡^{ツキ}理^{ツキ}といひしは
おもひにいひしは
いひしは
いひしは
集^{ツキ}といひしは
いひしは
いひしは
いひしは
いひしは
いひしは

いひしは
中納言^妻兼^妻補^妻といひしは
年^{ツキ}といひしは
いひしは
いひしは
いひしは
いひしは
いひしは
いひしは
いひしは
いひしは

いひしは
いひしは
いひしは
いひしは
いひしは
いひしは
いひしは
いひしは
いひしは
いひしは

いひしは
いひしは
いひしは
いひしは
いひしは
いひしは
いひしは
いひしは
いひしは
いひしは

い哥よそくをうへて成
まゝとらん家集うりや
作

家集より中より貫之集十卷卅六人集乃中よりあつ

朱雀院うせさせまひくるなり

くありて太皇太后宮乃をさへく

うさくそんぞうおつせ

三

所製
朱雀院所寄

これ行乃わ無そふありねと

ねえー、でも、あんなに、さう、

上
下

ちりへやま登りくちりのもへへ
 もくあへてしわきとちくまん
 やまのきく人おのくちく

山内桓武天皇平安城

ことゆつて人なれり
 せいふ材うゝの死
 人の事や孝と忠
 はあやう人知れど誰
 にも名実をきくう
 あわれもふれとのふり

坂をけりて人々を經の極より野山とてなり
 や古墓何世人不知姓^{ナリ}と名とつて侍りてなり

世の中をあらう

舟に坐して河にハス白波をうりあるりてくもの心し惠心傍邪
我哥ハ狂言綺語とくし嫌ひ多しと湖水の舟とて或人ハ哥を詠吟志
々々としてく我哥ハ観念乃助縁と成てとてそれなり候なりと信双
紙うらとていふ万葉六

忠蓮南山乃房のあり死を法席
乃尺竹くちきしきしきしきしき
れをんく
源相方朝臣
ノスケカマ

冬太子金馬入於片岡

山邊道人家有飢人

卧道頭去三丈許驪

駒届此不進太子加

鞭返巡猶馬太子自

言哀即下馬舍人

調使磨走進獻杖太

子步近飢人之上臨

語之可憐三何為人

耶於此而卧即脫紫

覆飢人身賜哥曰及

那照耶片岡山迹飯

飢而卧其族人可憐

祖無迹汝成ぬ米耶

刺竹之君速無母飯

飢而卧其族人可憐

三哥果紀と異と

志とてやうと云ふ

日本紀太子傳り

と云ふやうと有

太子傳撰集云

法隆寺抄云

那照耶片岡山の枕詞也

飯飢而飢人乃彼山に卧する

ハ哀也と云ふ祖無ハその

飢人と云ふは其の御親なり

と云ふなりと云ふなり

と云ふなりと云ふなり

と云ふなりと云ふなり

と云ふなりと云ふなり

と云ふなりと云ふなり

日本紀太子傳君速無

ねとやあさつうう

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

日本紀許都勢留

ねとやあさつうう

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

うやせ

天福元年
四條院即位之年也
定家卿應保三年壬
午誕生貞應元年
壬午六十一歲至天福
元年癸巳七十二歲凡

天福元年仲秋中旬以七旬有餘之盲月
重以愚本書之八箇月終功
此集世之明傳也指證本仍以較多四本校
合彼是取其要約此不審

抄并五百九十首 上三集晉下三百五十九首

其中

卷上

中納言師氏

あはれはふとくをきく
あはれはふとくをきく

或本云入後撰

いふきく

赤原清門

あはれはふとくをきく
あはれはふとくをきく

二首集不見也

六百九十二首 集抄(箱表)

拾遺抄并

春五十七

夏三十二

秋四十九

冬廿二

賀三十一

別廿四

卷上

七十五
一書集不見或本云下七十五一首集不見

雜上五百二

雜下八十六

已上五百九十首

此本付屬大史為相 顏齡六十八歲門融覺

判

融覺 為家卿法名

後鳥羽院建久八年誕生

龜山院文永元年卒

八家也 後宇多院建治

元年五月朔日逝七十九

以相傳秘本

祖父卿

具書字校合元

德治三年 改元延慶

系園院即位之年

德治三年同八月十七日 系議藤原朝臣判

延寶七年 己未 八月三日是抄出之初日也同年霜月十八日終切早 以符奉吟

